

特産品の生産に意欲的に取り組む

熊本県・鏡町・荒尾市

①い草農家 八代市：旧鏡町 浜 英俊さん

鹿児島本線熊本駅から普通列車で有佐駅に近づくと、やがて車窓いっぱい緑のじゅうたんが広がってくる。熊本県鏡町の基幹作物として全国に名を馳せている蘭草（イグサ）の田んぼである。

鏡町は昭和30年、有佐村、鏡町、文政村が合併して生まれた。「文政村」の名にも示されているように、このあたり一帯は、細川藩時代の文政年間から先人が営々と干拓を進めてきたところ、今では「日本のブラジル」と異名をとるほど広大な景観を誇っている。

この鏡町をはじめとする八代地域が有力な一翼を形成する農業県熊本では、すでに1,100名の認定農業者が誕生している。目標の1,500名からみると緒についたばかりではあるが、この数は九州ではトップ、全国でも6位という実績である。

熊本県が全国の栽培面積の83%を占めるといふイグサについてみると、その86%は八代地域で生産されており、ほとんどの農家がなんらかのかたちでイグサを手がけている。

そこで今回は、熊本県農地管理公社（魚住汎輝理事長）の田中繁生調査役、岡部政幸調査役のご案内で「イグサの町」といわれる鏡町の北新地（干拓地）で昨年10月認定農業者第1号となられた浜英俊さん（44歳）を訪ねお話をうかがった。



浜 英俊さん

浜家の働き手は目下奥さんの正羊（まさよ）さん（40歳）、それに浜さんのご両親（73歳と67歳）の4人だが、県の農業大学校の学生である長男の英明さん（19歳）がすでに後継者に決まっている。現在は水田2.5ヘクタール、裏作としてのイグサ2.4ヘクタール、合計4.9ヘクタールの複合経営だが、浜さんが昭和44年、高校卒業と同時に農業を継いだときの規模はイグサ0.6ヘクタール、水稲1.7ヘクタール、それにトマト・メロンが0.6ヘクタールだったという。その後、トマト・メロンのほうは「忙しすぎる」ため断念し、イグサと稲作に絞って着々と農地を拡大してきた。さらに、遠いところの農地を近くのものに交換し、「お互いによかった」といえるような集積をはかってきた。現在の自作地2.5ヘクタールは鏡町の平均規模1.4ヘクタールからみるとかなりの規模といえるだろう。最近では昨年スーパーL資金を利用して約20アールの水田を取得している。



イグサ畑の中の浜さんと奥さんの正羊さん

こうしてみると、浜さんはイグサに重点を絞りできわめて順調に経営を伸ばしてきたように思えるが現実にはそれほど簡単なものではなかったようだ。

農業機械の導入で、今でこそ農作業はいくぶん楽になったが、イグサの生産は「きつい仕事」の典型といわれている。イグサは11～12月の熊本地方ではもっとも寒さがきびしい時期に植付け、暑さがきびしい6～7月に刈り取りの時期を迎えるが、引き続き水稻の植付けに入るので刈り取り時期は午前3時には仕事に入るという極端な重労働を強いられる。刈り取りのあとには泥染め→乾燥→束ねて収納→長さを揃える選別→織機作業→仕上げ→系統への納品という一連のプロセスが待ちかまえている。

これらはどれひとつをとっても最終製品の品質を決定づける大事な仕事に違いないが、「付加価値」という観点からすれば、プロセスの後段になるほど気を使う仕事になる。浜さんのところでは、奥さんが選別に当たり、ご主人が4台の機械を操り、ご両親が仕上げを担当する、というかたちで鏡町製品の名声の一翼を担ってきた。

背が高く扱い難い原草、多くの工数を必要とする加工過程、どれをとっても「楽な農業」とは程遠い現状ともいえるし、現実に中国産の畳表なども入ってきているが、浜さんたちは「一級品はここだけ」という誇りをもってイグサ製品の一貫生産と取り組んでいる。残念なことには、畳表の生産では歴史の古い岡山、広島の技術、施設がいまでも無視できない。現に生産量の15%は最終段階までにこれらの県に流出しているのが実状だという。

手間のかかるイグサづくりには見切りをつけて、ほかの作目に転換したほうがいいのでは…という声もないわけではないが、これも後継者や経費の問題と切りはなしては考えられない。

そこで、浜さんはじめ地域のイグサ農家や町当局がいま考えているのは、付加価値の高い「本物の畳表」を生産して「鏡畳」「八代畳」のブランド・イメージを確立していくという「正攻法」である。さらに新用途開発の面でも畳表にとどまらず天井用、ふすま用などイグサの新たな商品化とも積極的に取り組んでいきたいとしており、ここでも多用途に活用できるスーパーL資金の役割に大きな期待を寄せている。



左から農業委員会の本田係長、浜さん、奥さん、県公社岡部さん、田中さん

②梨農家 荒尾市 吉田 求さん

熊本県でいち早く認定農家となり、意欲的に農業に取り組んでいるもう一つの事例をみるため荒尾市に足を運んだ。

荒尾市は、熊本県の西北端にあり、福岡県大牟田市とすぐ隣合っている。市の東端に小袋山があり、その裾野が西に向かって低くなっていき、やがて有明海にぶつかる。そんなところに位置し、気候も年間を通じてきわめて温暖である。

当地の農業概況を知るために、まず、JAたまな八幡支所を訪ねた。JAたまなは40を超す支所を持つ熊本で有数の広域農協である。その中でも八幡支所は組合員2700人を擁し荒尾の農業振興に大きな役割を果たしている。

支所では、菰田 休支所長が地域の農業について懇切丁寧に説明して下さった。

荒尾市の耕地面積は約1,100ヘクタール、農家戸数1,500戸、平均経営面積0.7ヘクタールである。農業形態は、粗生産額でみて果樹が40.5%（うちナシが24.6%、ミカン15.9%）、米15.7%、生乳12.5%である。果樹と米との複合経営が中心となっている。荒尾の基幹農作物のナシは、明治時代から生産が始まったが、今日ではその中でも、子供の頭ほど大きなジャンボナシ・「新高ナシ」の生産では全国一の実績を誇っている。

しかし、ここでも高齢化と担い手不足による遊休農地と荒廃農園が目立ってきている。

「稲作での後継者不足、果樹での老齢化、これが当面する問題です。この解決のためには、ポイントを整理しながら、長期的に地域農業をみる必要がある。そのためには地域の関係者の連携が大いに望まれます」と菰田支所長は熱をこめて語ってくれる。

「若い担い手、後継者が一人でもでてきてくれて、農地の有効利用が図れたらいいのですが…。その点からも、スーパーL資金は機械化や干ばつ対策などにも使えるので、意欲をもってやろうとする農家には魅力があると思います。今度の資金が起爆剤となってくればいいと思う、JAでもこの資金のPRには力を入れています」。

そこで、荒尾市で、認定農家のトップを切り、スーパーL資金を活用した意欲的な若い農家を訪ねた。

荒尾市野原の吉田 求さん（27歳）。

吉田さんは、ナシと肥育馬を組み合わせた複合経営を展開している。現在のところ労働力は、吉田さんのほか、お父さんの瑞穂さん（54歳）とお母さんの久子さん（50歳）の3人だが、この秋には大牟田市で保母をしている紋子さん（26歳）を新妻として迎えることになっている。その紋子さんも新天地での生活に意欲をもやしており、「若い戦力」としても大いに期待されている。

ナシの生産では、既存園（成園）が40アール、それに県公社からの借入地（未成園）1.6ヘクタールの2ヘクタール。この借入地は担い手タイプを活用したため、5年たった今年、買い入れ時期を迎えた。そこで、吉田さんは利率3.5%の農地取得資金でと、この2、3年前から考えていたが、今回、スーパーL資金を知り、さっそく認定農家となり、資金活用を図ったのである。このあたりのことを吉田さんは、「タイミングがよかった。やはり条件のよい未成園は自作地にしたいですね。いまのところ馬の肥育の収入のほうが大きいですが、近い将来はナシ一本で行きたいですから」



ナシ園の中で吉田 求さん

と明るく話をしてくれる。

複合経営のもう一つの柱、肥育馬のほうは、現在のところ35頭を肥育し出荷している。実は、吉田さんの馬の生産は特徴のあるもので、近くの荒尾競馬場の競争馬の廃馬を一年かけて肥育し、熊本特産の「馬刺し」用として市場に出している。

「父が乳牛をやっていたんですが、自由化を迎えるというので馬に変えたんです。生きものを扱うと楽しみもあるんですが、精神的な負担が大きいのです。競争馬は気が荒いものですから油断するとかまれたり、蹴られたり大変なことになります」。

吉田さんは昭和63年に茨城県筑波の農水省果樹試験場の2年研修を卒業し、荒尾市に戻った。

「荒尾に帰って農業の面白さを実感しました。ナシ中心に規模拡大を図りたいという意欲が日ごとに強くなりました」と、吉田さんは語ってくれる。

「荒尾には梨部会の青年部があり、現在18名の仲間とは、なによりも消費者ニーズに合ったもので、より品質の高いものに挑戦し、お互いに基盤強化を図ろうと話合っているんです。荒尾に戻って本当によかったですよ。自由に時間はとれるし、若いなりに行動できる。台風と晩霜の心配さえなければ最高の人生ですよ」と笑いながら話は尽きない。

自然災害といえば、荒尾では、この2、3年間毎年のように災害にあったという。

このあたりをご同行いただいた県公社の田中繁生調査役と岡部政幸調査役は、「この対策には県公社も悩みましたね。しかし、今度のスーパーL資金は設備資金にも利用できるので、晩霜対策のための乾燥設備やかん水のためのボーリング設備にも使えます。農家にとってはいい制度資金ですので、今後、吉田さんのような意欲的な農家がでてくれるのではないのでしょうか」と、こもごも語ってくれた。



吉田 求さんのナシ園



左から県公社の田中さん、岡部さん、吉田さん、JA たまな八幡支所の菰田支所長、お母さんの久子さん、荒尾市の上園参事

特産品の生産に意欲的に取組む

い草農家（八代市：旧鏡町 浜 英俊さん） 梨農家（荒尾市 吉田 求さん）

（農地ふぁーむらんど No8 平成7年9月号掲載）